

## 位相論・ポライトネス理論から見た「文豪アンドロイド」の対話設計

島田 泰子 (二松学舎大学・日本語学)

## はじめに (概要)

セッション5の趣旨にある「発話のストラテジーや言葉遣いによる違いが人に与える印象や関係性構築にもたらす効果」に関わる具体例として、「夏目漱石アンドロイド」における一事例を報告したい。

「夏目漱石アンドロイド」とは、大阪大学基礎工学研究科石黒浩研究室と二松学舎大学大学院文学研究科との共同研究プロジェクトとして、実在した明治期の文豪・夏目漱石をモデルに制作されたアンドロイドである。文豪・偉人などといった「歴史上の」著名な人物をアンドロイド化する事例としては前例がなくこれがまさに嚆矢となるため、阪大側の工学系研究者と発表者を含む二松側の人文系研究者とが共同研究チームを編成し、さまざまな試行錯誤が今なお継続中である（漱石アンドロイド共同研究プロジェクト編 2019）。

本発表で取り上げるのは、この「漱石アンドロイド」という擬人エージェント（AI 未搭載）と生身の人間との間に設計された、ある対面式心理実験プランの失敗談である。当初設計された実験プランでは企画者（工学系の共同研究メンバー）が意図したような対話がうまく成立せず、予備実験の段階で暗礁に乗り上げてしまい、本実験に向けて対話設計の抜本的な改訂を余儀なくされた。人文知に照らせば、この失敗の主な要因の1つとして、講演向けの発話を前提として作られた「漱石アンドロイド」の仕様と、至近距離での談話形式による対面実験という用途とのあいだに大きな齟齬があったことが指摘できる。このことは逆に、通常の間人同士の対話において重要な要素となる「発話のストラテジーや対話相手による言葉遣いの違い」「円滑なコミュニケーションのための（略）ポライトネス理論」（セッション5趣旨より）を浮かび上がらせる結果となった。以下、これについて詳述する。

## 1. アンドロイドの発話行為をデザインするとは (総論)

AI 未搭載の漱石アンドロイドは、自律的な発話生成が出来ない。そのため、事前に用意された台本に基づいて tts ソフト (AI Taik 4 を使用) で生成された合成音声を、操作者がタイミングに合わせて操作しスピーカーから再生することで、発話を擬似的に実現している。この点ではあくまである種の傀儡 (操り人形) に過ぎず、つまりは発話内容の台本スクリプトを手掛ける生身の人間の言葉遣いや他者との関わりにおける流儀<sup>マナー</sup>などの特性が、漱石アンドロイドの言動にそのまま反映されてしまう。

大勢の聴衆に向かって行う講演・演説などの場面ではさほど問題とならなくても、至近距離かつ小人数の対面における談話行動に擬した発話行為においては、デザインの重要性和それゆえの難しさは増大する。「書きことばを読み上げる」講演とは異なり、談話においてはより私的なスピーチ・スタイルが取られることになるからであり (→後述の各論1)、また、一方的な伝達に終わらない対話式の談話行動においては、対話相手とのインタラクションの要素が増えるためである (→後述の各論2)。

不適切な発話行為、特に本発表で取り上げる事例のように「失敬な」言動を不用意にアンドロイドにさせてしまうと、対話相手に違和感や不快感を含めた情緒的な反応を抱かせることになる。踏み込んで言えば、漱石の人物像 (人柄、性格、人格) に関する印象や評価を損ねることにもつながりかね

ない。このため、「発話行為」をデザインすることは、アンドロイドの人格をデザインすることに等しいとさえ言える。

## 2. 位相論的側面から見た発話行為デザイン（各論1）

芸能人に代表されるような実在の著名人をアンドロイドにする場合、「言葉つき」や「語り口」が本人と大きく乖離していたのでは、当人を知る身内やファンなどにとって違和感は否めまい。「体つき」や「顔つき」と同じく、「言葉つき」は身体性さえ伴ったある種の個性であり、さらにそこには単なる個性のレベルを超えた「位相論」的な背景がある点に注意が必要となる。

variations in style and social classes という英訳がその内実を端的に示すとおり、ことばの「位相性」の要素としてあげられる項目には、性差、地域差、時代差・世代差、階層差、場面差などがあり、そういった発話者の属性・発話の環境などを含めた言語運用上の背景的条件によって言葉遣いの細部は如実に変容する。その条件と変容の実態、さらには両者の関連性という局面を、観察や分析の対象と捉える視座と方法論が「位相論」である。世代差や地域差などに加えて、かつての日本社会では、社会的階層による言葉遣いの違いが顕著であったため、明治期初頭の東京の話ことばには、同じ内容を言い表すのに階級や年齢性別に応じて、例えば「あたいにもそれをくんな／私にもそれをちょうだいな／僕にもそれをくれたまえ／わしにもそれをくんねい」など、実に多様な位相的変異が実在していた（田中章夫 1999）。没後 100 年を経過してアンドロイド化された漱石の場合、生前の語り口を記憶する近親者はすでに生存しない。よって、“しゃべり方の癖をモノマネして本人の口調を再現する”というレベルで捉えるならば、そこに正解など無いという発想になろう。しかし位相論的に見れば話は異なる。「明治」の「文豪」そして「江戸っ子」の「男性」といった当人の属性（時代性、知的階級性、地域的特性）をその発話に適切に反映させる必要が生じるのである。

これに対して標準語・共通語と言われる言葉遣い、上の文例で言えば「わたしにもそれをください」という日本語は、ことばの位相差を排除しようとして措定されたもので、発話者の属性が反映されることを払拭したところに成立する、言わば無色透明な言葉遣いである（近代国家日本の共通言語として教育の力によって普及させた結果、今やあらゆる階級・階層・年齢・性別・地域を超えて広く使われるようになった）。その経緯と本質から“よそ行き”かつ“書きことば”寄りの物言いという位置付けと味わいを持つため、“漱石らしさ”が感じられず、物足りないとの反応を、時に招かせることにもなる（江戸っ子らしくべらんめえ調でしゃべらせてほしい…とのリクエストもしばしば聞かれる）。

また、話し手との関係性や心理的な距離感、発話者のモード（本音と建前の切り替えなど）に応じてスピーチスタイルを適切に選択し、打ち解けた会話では私的な属性が顔を出すのが“自然”な人間のあり方である以上、講演はともかく、至近距離での対話においていつまでもよそ行ふうの語り口を続けられれば、場合によってはよそよそしさにもつながり対話相手が打ち解けられず、あるいは場に不似合な改まりのトーンが、対話相手にまるで面接か口述試験のような印象を抱かせたりもすることになる。こういった場面差に応じた言葉遣いの位相的なスイッチングに関する工夫は、アンドロイドの発話行為における“人間らしさ”の追求にとって重要な要素であるが、これはすでに次の話題、「各論2」で述べるストラテジーやポライトネスにかかわる問題となってくる。

### 3. ポライトネス理論から見た発話行為デザイン（各論2）

講演用に作られた漱石アンドロイドに至近距離での対話をさせようとして、そこに“自然さ”“人間らしさ”を再現させようとした場合、現状では、課題も多く限界もある。

人間同士のコミュニケーションでは、言語外の項目もインタラクションの重要な構成要素であるため、ノン・バーバル（非言語）、パラ・ランゲージ（言語の周辺要素）といった繊細な表出機能が実装されていないことから来る“不自然さ”は、1つ目の課題となる。例えば、適切な相づちや頷きなどは“傾聴”のサインとして重要な情報伝達を担うため、それ無しで無表情のままのアンドロイドに睨み付けられては、対話の相手は圧迫感を拭えない（話していて不安になり、萎縮してしまうなど）。これと連動して、対人上のマナーであるポライトネスに関する要素をいかに実現させるかが、2つ目の課題となる。セッション5が趣旨の中にトピックとして掲げる「ポライトネス」は、話し手の（対話相手に対する）“配慮”に関わる要素や原理を論じるものであるが、相手への“気遣い”とでも言える、成熟した社会性の反映としてのポライトネスは、複雑なパラメータにより構築され伝達される高度なものであり、言語外要素が十全ではない作りのアンドロイドにはハードルが高い。具体例としての失敗談を、以下に挙げる。

問題の対面式心理実験は、被験者を対話相手（＝統制条件）によって2群に分け、無名アンドロイドと漱石アンドロイドでどのような反応の違いが出るかを調べようとするものであった。実験の企画者は、「著名な文豪である漱石アンドロイドと間近に会話をする機会を得た被験者が、（無名アンドロイドと違って）気分的に高揚したり良いところを見せようとしたりするような作用を、漱石アンドロイドから受ける」のではないかと、そしてその結果「漱石アンドロイドに促されて自らの考えを述べる中で、ふだんは言わない高尚なことを、やや背伸びをして言ってみたりする」のではないかと、という“仮説”を打ちたてており、比較実験を通じてそれを実証するデータを取りたい、との狙いを持っていた。そこで実験企画者は、「被験者の考えを引き出す」ための質問として、漱石自身に関する話題にまつわる問いかけを用意した。アンドロイドとして100年の眠りから目覚め、自分に関する妙なうわさが今の世に広まっていることに気付いた漱石が、困惑し、対話相手に折り入って教を乞う…というストーリー設定である。

身に覚えのないエピソードが実話のように広く知れ渡っているが、どうしてそんな話になっているのか知りたい、気になるので考えを聞かせてほしい、と尋ねる漱石アンドロイドに対して、被験者が何か答えると、さらなる別のアイデアを引き出すために、アンドロイド漱石は、その説明ではよく分からない、今度はもっと具体的に説明してください、と続ける。被験者の2度目の説明に対しても簡単に納得せず、まだよく分からない、今度はもっと客観的に説明してください、と返す… そうやって繰り返し漱石アンドロイドに尋ねられるうちに、被験者からは、本人も予想しなかったアイデアが引き出され、自分でも思いがけない説明が次々と湧いて来る…とのもくろみは、テストのための予備実験の段階で見事に裏切られる結果となった。被験者から何種類もの説明が次々と出てくることなど実際にはなく、むしろ、繰り返し説明のやり直しを要求する目の前の漱石アンドロイドに対して、プレッシャーを強く感じたり、反発や困惑、話の通じなさ・噛み合わなさに対する違和感などを抱くという情緒的な反応が観察されたためである。

教を乞う側が教えてくれた側に対してその説明にダメ出しするなどというのは、相当失礼なこと

に当たる…というのは、日常生活においてある程度共有される感覚であろう。面と向かって説明が悪いと言わんばかりに「もっと具体的に」などと要求を重ねるのは、いかに婉曲な物言いに工夫したところで、「教わる側の知りたいという欲求を満たすために、教える側にさらなる手間と負担を掛ける」ことになる点で、厚かましくずうずうしい印象を与える。ポライトネス研究におけるリーチの理論に即して説明すれば、発話者が「他者の負担を最小化」し「他者の利益を最大化」すること（気配りの原則 *tact maxim*）、そして「自己の利益を最小化」し「自己の負担を最大化」すること（寛大性の原則 *generosity maxim*）という2つの重要な原則に違反して、「他者の負担を増やしてまで自己の利益を最大化」しようとする発言になっているからである（山岡ほか 2010）。

理解のために自ら努めることなく相手の負担を繰り返し要求する言動は、儀礼的に（恐縮のポーズとして）困惑や苦悶を表出する“力み”や“空気すすり”のような音声的な仕掛け（定延 2005）すら伴わないのであれば、相手へのポライトネス（配慮）を滲ませた“礼儀正しさ”にはほど遠い印象を与えることになる（発話者の年齢や立場に応じて「生意気な礼儀知らず」「権威を笠に着た高圧的な物言い」など、人格にまで踏み込んだ評価にもつながりかねない）。

## むすびに代えて

本発表で取り上げた事例において、被験者の説明した内容に一切触れることなく重ねて繰り返される漱石アンドロイドの一方的な問いに圧迫面接のような威圧感を感じ「イヤな汗をかいた」被験者が複数いたことは、示唆に富む。リラックスして打ち解けた対話を実現するためには、発話内容そのものだけでなく、対話の場面を取り巻くさまざまな要素を含めた総合的なデザインの、抜本的な改訂と再構築とが必要となろう（先に触れた「場面差に応じた言葉遣いの位相的なスイッチング」や、それに即した姿勢やジェスチャーにおけるコード切替も、そこには含まれるだろう）。本発表で、デザインの対象をアンドロイドの「発話行為」と一貫して呼んできたのは、まさにそのことの反映であった。

コミュニケーションが不器用で社会生活に困難を抱えるタイプの“個性”を持つ人もいる。PCのサポートセンターでお客様窓口の電話対応に当たるノンネイティブ日本語話者の発話が、似たような事情から、無礼だの対応がなっていないのとクレームの対象となることもある。多様性への理解が進む包括社会到来の時代にあってどちらがどちらに歩み寄るかの議論はいま措くとして、当面はAIにも同様の課題があるだろう。文字通りの語義や文意の外延にあるポライトネス要素の扱いに関して、情緒面でのコミュニケーションも考慮した対話システムの開発に何らかの貢献が出来れば…と、以上、人文系サイドからの事例報告を行った。予稿論文では、紙幅の都合上、図版等を割愛した。漱石アンドロイド共同研究プロジェクト編（2019）の拙稿も、合わせて参照されたい。

## （参考文献）

- 金水 敏（2003）『ヴァーチャル日本語〈役割語〉の謎』岩波書店  
定延 利之（2005）『ささやく恋人、りきむレポーター ―口の中の文化―』岩波書店  
田中章夫（1999）『日本語の位相と位相差』明治書院  
山岡政紀・牧原功・小野正樹（2010）『コミュニケーションと配慮表現 日本語語用論入門』明治書院  
漱石アンドロイド共同研究プロジェクト編（2019）『アンドロイド基本原則 ―誰が漱石を甦らせる権利をもつのか？』（日刊工業新聞社）